

たもの売り始め、それが評判になり、どんどん売れ出して、農産物の供給組合をお作りになったのです。そして安定供給がされるようになって、それを買うために人が集まる。トイレや食事とか土産だけではないものもできてきた。その場では、地域の写真展をやるとか、ちょっとしたイベントをしていました。

澤登 それはすばらしいですね。

芦田 道路は、通過交通だけだと、地域の人は疎遠だと思うところがあるのです。しかし、道の駅は、地域とのコミュニケーションがあるのだという気がしました。

澤登 今のお話をうかがっていると、地域住民がその拠点に参画していくわけですね。そうい

う地域の人たちの思いや、自分たちが自主的に作り上げていく気持ちや行動は、そこが単なる物産を売る場だけではなくて交流の場になっていきます。

芦田 地域の人たちが思い入れをもつような作り方を最初からしてやれば、新しい使われ方になるということですか。

澤登 地域の人たちが何の得をするとか、それができたら自分がどうなるかというのがあれば、懸命に作り上げていくのではないのでしょうか。行政はそういう場を作っていく、行政がやり過ぎてはいけない部分があります。ただし、地域の中の幅広い人々が参加できる施策は必要だと思います。



河川敷の利用

工藤 今、荒川の下流部でのニーズは、きれいなトイレが欲しい、木陰が欲しい、水道が欲しいということです。荒川に来る人はいろいろなことをやっています。釣りの人もいるし、散歩する人もいる、走る人もいる、ただ座って本を読む人もいる、植物を見る人もいます。川に多様なものがあ

って、そういうフィールドになっている。自分の好みのものを見つけ出して、川と触れ合う。そこで共通的に必要になってくるのはトイレと木陰と水飲み場ということになってくるのかなと思います。道の駅というのは、車で走っていてそういうところがあれば、やはり寄りたくなる。そこは川と道路で違うところがあるという気がします。

澤登 お手洗いというのは重要だと思います。新しい技術、バイオの浄化作用装置などを活用していけばいいと思うのですが、難しいのですか。河川敷にはお手洗いが少ないですが。

工藤 最近は、河川敷のトイレも水洗式が着実に増えつつあります。たとえば土壌浄化でやっているものもありますし、町から下水管を直結しているところもあります。

笹森 川は、野球場があったり、サッカー場があったり、空間は提供されているのですが、もう少しやさしい部分があってもいいような気がします。江戸時代の本など読むと、昔から川遊びなど、いろいろなものがあったと思うのです。もちろん効率性というのもわかるのですけれども。

工藤 そこについては技術開発が欠けていますね。この間も洪水がありましたけれども、ゴルフ



場の売店だとか、小屋が川の中に流されて、いろいろなところに引っかかったりしましたけれども、洪水が来ても大丈夫のようにさせていくかということについて、そこは今までで勉強が足りなかった点でもあります。

ただ、新しい利用ということでは、緊急河川敷道路ができて、たとえば荒川の下流部でフルマラソンコースがとれます。隅田の水門あたりから朝霞の水門までずっと。

澤登 それはすばらしいですね。河川敷から川の道の新しい活用の仕方が考えられます。

笹森 利用ということでは、住民にもリスクテ

ーキングというか、「危ないから川辺に行っちゃいけない」というだけではなくて、危ないのだけれどもこうやって遊べばいいし、川に落ちたり池に落ちてしまったりというのも自己責任なのだよというあたりは。公共物を管理している立場からいくと、われわれとしても難しいところがあります。

澤登 住民エゴもあります。マスコミはそこだけを取り上げがち、やはり参加型、提案型。第一ボタンをきっちりしておかないと。住民が自分たちの言葉でつないでいかないとだめだと思います。



新しい作り方

芦田 対象物の話から、作り方、手段の話になって来ましたので、そちらの話題に移りたいと思います。先ほど澤登さんからお話がありましたが、住民の方はいろいろなことをおっしゃいます。そういう中で、私たちは一つのものを作らないといけないわけですが、コンセンサスの取り方について荒川下流ではどんな取組みをされているのですか。たとえば、あらかわ学会は、どのような活動をされているのですか。

工藤 荒川に興味のある方々がご自身の発意でいろいろ勉強される場です。

芦田 そのことが結果的にこれからの川を作っていくことに対して役に立つ面とか、そういうものはありますか。

工藤 あると思います。各主体が、いろいろな形で刺激されて、そういう成果をどう生かしていくかということに進めば有効だと思います。建設省では、あらかわ学会で荒川の自然環境マップの作成や舟運に関する出版等の成果を出していらっしゃるのです、活用させていただいております。



情報提供と熱い議論

芦田 荒川では情報を共有化するための装置とか仕掛けみたいなものは、どんなものをもって

らっしゃるのですか。

工藤 記者発表は今どんどん頻度を高めて、き



め細かくやっていくということをやっています。記者発表資料なども各方面の方々にダイレクトメールで送って、じかにご意見を聞いています。あとは、インターネットもあります。また、行政の情報というのをきっちり充実させていかななくてはと思っています。

芦田 地域の人とのコミュニケーションをとりながら、ものを作る方法としてはどんなことをやっていますか。

工藤 さまざまなチャンネルがあります。その中で情報をいかに公開して情報をいかに共有して

PI の試み

芦田 情報提供とか合意形成について、笹森さんも話題提供していただけますか。

笹森 道路では、パブリック・インヴォルブメント (PI) をはじめています。これは平成10年度にスタートした今の新しい道路整備5カ年計画作成の中で全国で何十万もの方の意見をいただくなかで始まった動きです。

今は、PIを通して住民参加を得ながら計画を進めていこうということ、当事務所でも

いくつかということ。それから極力目に見えるところでの合意形成を図っていこうということを目指して取り組んでいます。各地区でやっている市民会議や、インターネットの情報提供もそうです。

澤登 村長さんや町の役どころ、市民運動の一部の人たちに聞きましたぐらいで全体のお話として考えがちなのですが、もう少し幅広い人々の情報の集め方がないのかと私は思います。

それは、日常性を踏まえたきめ細かい情報を集め、そこに対してどう思うかということを再び問う。何も参加型がすべてではないし、総合性がわれわれに欠けてしまっている。分析的、解析的なことはできても。総合力というのは自分を主体として、川とは何なのか、道とは何なのか、どうしたいかという関係の中から生まれてくるという気がするのです。

行政の方は行政の立場から熱く燃えることであり、あるときは喧々諤々けんけんがくがく討議していいと思うのです。討議して新しいものを作っていくには熱くならないとだめではないかと思えます。

芦田 熱くなるというのは、作る方も思い入れをもち、相手ももち、お互いが議論をする。お互いの思い入れをぶつけ合うというやり方がまず一つはいるのですね。

澤登 ビジョンや方向性もともに作り上げていく、それぞれ課題はわかってきているのです。解決に向かったのコミュニケーションが必要です。

東京外郭環状道路の東京都の区間、16kmの部分でこの方法をとっています。今までですと一方的に情報提供していたのですが、相手に届けるところまで努力する、あらゆる手段を使いましょうということ。インターネットにホームページを開設したり、ホットラインの電話をつけたり、広報誌を出してまず情報を共有しましょうと。

第2段階としては意見を聴取しようということ、アンケートやインターネットのeメール

や、ファックス、電話、はがきなどをいただく。これからは、現場でオープンハウスや、意見交換の場を設けて、その場でお答えするというものもしていきたい。どういう意見をいただいたかも公開していこうと思っています。その情報は、計画

に反映させられるもの、させられないものが出てくると思いますが、こういうことで取り入れられませんということをはっきりとしていく。それを繰り返していくことで計画の熟度を上げていこうというのがPIです。



参画と学習

澤登 やはり、ビジョン作りからプロセスに対して参画する。その作業が重要だという気がします。お互いに知り合わないといけないということで、アメリカの方でラーニング・オーガニゼーションというコミュニケーション技法があります。それをコミュニティの中に持ち込めないかと思えます。

もう一つ、ニューヨークが安心できる町になったきっかけは、小さな空き地も参加型にして公園作りをし、福祉マインドを作ったからと聞いています。高齢者も子供も外国人も当事者として参加する分責任ある行動を伴います。

誰を入れようかといったときに、自分の意見に安全な人、同質の人で固まっていきがちです。実は同質ではない人々とのコミュニケーションをどう作るかが課題です。

芦田 PIも意欲的な取り組みだと思うのですが、参画の大事さがある程度わかったとしても、特に道路事業はエリアが非常に広いというか、そういうものにどう参加してもらったら一番いいか難しいですね。



いいつき合い——気持ちいい関係を

澤登 やはり日ごろのつき合い。共用空間や情報をきめ細かく作り上げていく、その辺は手間ひまがかかるという前提が重要ではないでしょうか。

子育てしたり、要介護の人を抱えてくるとコミュニティの必要性を実感するわけです。そこから始まると思うのです。それを日常性の中で培っていく。そのときに否定から始まらなくて、楽し

いとかおもしろいとか、気持ちいい関係性を作るにはどうしていくのかということです。

理屈が先行しますと、説得して納得させていく。力わざになっていくのです。女性やリタイアメントした人、若者は、経済の流れの端っこにいて、自由にいえたり行動できる立場にいる。彼らが地域で活躍できる場が欲しいものです。

芦田 マルチのつき合いをすると、行政がさば

きをするみたいなのがありますよね。

工藤 そういう中でいろいろなことができていくわけですから、お互いの顔が見えるように工夫をしていくということになると思います。ただ、人口が多いところでどうやってフォローしていくかというのは、非常に難しい問題もはらんでいるのも事実でありますけれども。

芦田 川の場合は、川はそこにあるから共通の場が作りやすいです。道路の場合は何もないとこに作っていくから、そういう意味で最初の仕掛けは難しいです。これから考えられると思いますけれども。互いの顔が見える場の作り方は、今まで工藤さんの事務所ではどういうことをやってこられたのですか。

工藤 たとえば、荒川に関する情報の受発信拠点となる「荒川知水資料館」の整備や「荒川クリエーション」と総称しているイベントの体系的な実施ですね。

芦田 そういったことをうまくやっていく方法というのは、何かお感じになっていることはありますか。日ごろのつき合いをうまくやっていく点では、役所の人は転勤があるので、人が替わるとつき合い方が変わる可能性があるのですね。そういうことも含めて役所の人が地域とのうまいつき合い方を考えないと、関係性がうまく保てないのかもしれないです。あるいは、澤登さんのような人たちが間にいらっやって、そういうところをつないでくださるとか。



——価値観のぶつかり合いが大事

澤登 こじれてしまったものをどうやって直していくのか、せっかいい関係が1人か2人の誤解でこじれてしまいますね。そういうときの対処の仕方は難しいですね。また、関係がこじれたときの、戻し方が、非常にいい財産になっていくことがありますね。こじれたままでいくと非常にきつくなりませんか。

芦田 そういうときもあるかもしれないけれども。ないように、ケース・バイ・ケースのテクニ

工藤 制約条件は時間だと思います。それはたとえば、人事異動があったことによって、お互い初めてになるわけですから、そのところは知らない方といかにして知り合うかということだと思います。

芦田 転勤があった場合、こちらの方がその地域ではポテンシャルが低くなってしまふ。相手の人はその周辺状況も全部知っていて、ここに異分子の人が1人入ってきたなという関係ができてしまふ気がするのです。互いの理解を得るという意味では、こちらが理解していないケースが結構あったり。

澤登 仕組みを作り上げていく流れの中で、地域の所長の役割を市民は見ているわけです。評価と同時に、その人物という二つの視点から。

客観的なインフラが作られていないと、代が替わって今まで作ったものを無視して新しいことを始める、今まで参加してきた人は無視された気分を味わい、自分達がしてきたことをどうするのを見ています。そこに住み続けている人たちは、ずっと当事者ですね。その辺のギャップがあります。

工藤 地域の方々といろいろやっていくのは、所長だけでなく、事務所職員全員がこれをしていくという話になりますので、そこはみんなで汗を流しながら努力をしていくということだと思います。

ックという気もしないでもないです。

笹森 私は、一定の意見の対立がないと本当のコミュニケーションが始まらないと思います。それ以前は一方的な説明に終始する、相手から意見がとれないということだと思います。反応がないからそれでいいと思ってしまうということだと思いますが、意見の対立を見てはじめて、何が起っていたのか、何をいって失敗したのかがわかって、それでそこから、それは誤解ですということ

るから始まってやっていくということではないか
と思います。

澤登 このコミュニケーションは、おっしゃる
ように、味方になってくれたり、わかり合うので
す。今までのやり方というのは、臭いものにはふ
たをしる的な発想が多かったような気がします。
そうすると住民の方では、住民の言葉、主観でカ
ラに閉じこもってしまいます。

工藤 われわれの立場でいうと気がつかないこ
とが、住民サイドでは、実は非常に問題だとい
うこと、これはありうることで、それが行き違いの
原因になる場合もあります。そこは、どれだけ知
り合っているいろいろな話をしていくかに、最後は突
き詰めればそこに行くのではなからうかという気
がします。たとえば、何か考えるときに、あの人
だったらこういうのではないかということが常に
頭の中にあれば、それはもう事前に大体、いろい

ろ考えていけるわけですから、いかにそういうふ
うにもっていけるかということだと思います。

笹森 接点がないと、お互いに好き勝手なこ
を言い続けているわけです。それが、接するとい
うところが、意見の対立だと思うのです。それで
相手の領域を少しずつ取り込めればきちんとコミ
ュニケーションができるし、あるいは、それを全
く拒否する人たちもいるわけです。そういう人た
ちがたくさんいるのだということがわかっていな
いと、うまくコミュニケーションしていけないの
ではないかとは思っています。

澤登 こだわりの焦点が違うこともあります
ね。行政の方がこだわっている部分と、宇宙観も
違ってしまふ。ですから、そのこだわりが解読で
きると、お互いに相手の立場にもなれてくるので
しょう。

行政の役割をきっちり説明

工藤 われわれが心配していること、たとえば
治水上こうところが危ないというようなこ
と、その辺についても市民の方々からは、日ごろ
から説明がないというご指摘もあります。きちん
といつもいっていないではないか、いっていない
からわからないのだと。そういうところも改善し
ていく必要があると思います。

澤登 行政の方はあまり迎合する必要はない
と、私は思います。自分の役割どころをしっかり
伝える必要があると思います。あまりにも寄り過
ぎることは信用を欠きます。

芦田 それはそうです。先ほど工藤さんがおっ
しゃった、いってないといわれるのは、いって

るけれどもいい方が十分ではないという意味です
か。

工藤 そうですね。気持ちとしてはいっている
けれどもということですよ。

芦田 伝わるほどまではいっていないと。

笹森 パンフレットでこういっているではない
か、うちの事務所の雑誌でこういうふうにいっ
ているのではないかといても、そんなものは見たこ
とがないといわれてしまって、けちよんとなって
終わりというのが多いです。

芦田 多いですね。さきほどいわれたように、
とことん相手に届いたとわかるまでやるというこ
とが必要でしょう。

事業の満足度——一緒に作ることから

芦田 もう一つはこういうことをやったとき
に、私たちは、最後は国民の満足度をどう高めた
かということですが、どれくらい満足されている
のかとか、いわゆるサイレントマジョリティーの

声をどう聞くのかとか、その辺の聞き方があるの
でしょうか。

澤登 行政の方々には、2025年は高齢化率がどう
か、数値や総論で語っていますが、実は生活者の

方では、日常生活の連続で物事を考えています。たとえば、老後いくらかかるか、約8,000万円がかかってしまう（年間400万円で20年間）。どうすればよいかや、孤独になったらどうしようなど、ごく日常的な細かいことに対して不安を覚えるのです。この地は仲間がいたり、何かのときにちょっとサポートしてくれたり、気持ちを配慮してくれたり、見守っていてくれる人がいる。コミュニティの評価をし満足度に繋がっていく。

大きな道路、ITSも、小さな道路もどうなっていくのか総体的にとらえコミュニケーションを図ることが満足度につながっていくということではないかと思うのです。

産業社会の枠で、生活者を消費者としてとらえてきたのに対して、家庭もコミュニティも、実

は命を生産しながらいろいろなものを生み出す場としてとらえ直す、どんなインフラが必要か、聞き答えていく関係が重要と思うのです。

対立関係になりすぎてしまっている、絶対的なものとして次の世代の子供たちにとってどうかを軸とする、日常の言葉で話していく。満足度は自分たちが作り上げていくものだという認識が住民に必要と思いますね。行政が評価の物差しを作っていくのではなく、自分たちにとって満足度がどのくらいか投げかけるのも必要かもしれません。

対話、参加から参画、福祉マインドを築いていき心のバリアをとっていける手法が大切です。

芦田 そうですね。事務所長さんからもお話しいただけますか。



新しいコミュニケーション技術——複合的な提案から

笹森 広域な国土基盤を整備していると思っています。それに対しては、事業評価制度がありまして、コストベネフィット・アナリシスというようなことを始めているわけです。国民全体に対するメリット、デメリットという意味で一定の評価はできるようになったと思うのです。

ただ、それが正しいのかといわれたときに、ある市長さんに、「道路は不特定多数の人の利益を得るために特定少数の方の犠牲の上に成り立つものだ。そこをどういうふう調整をするのかというのが、これからのコミュニケーションなのではないか。」という話をお聞きして、そのとおりだと思うのです。トータルとしてその事業がいくら評価されても、実際に受け入れるべき地域の方の満足度も上がらなければいけないということを、今までは、全体の利益があるからいいではないかということで、ある意味で強引であった部分もあったかもしれません。たとえば、都市計画道路の幅の中だけをバリバリとはがすと、それは地元の人にとってはコミュニティの破壊になるわけですから、相当の摩擦になるでしょう。ただ、沿道土地画整理など、少し広いエリアに対して、少

ずつよけていただくとか、近くの空間地を活用しながら、そちらに移動していただくようなことをしながら整備していくと少しは摩擦も減っていく。まちづくりという形で入り込めれば、われわれはもう少し相手にも理解を得られます。今は、そういう複合的な策をいかに持ち込めるかということ工夫しながら、コミュニケーション技術を磨いているということだと思います。

芦田 いい提案ですね。事務所が複合のメニューを出せる方向に行くとうまくやれる。

笹森 道とか、川の事務所とかいわずに、もっといろいろなことを地方公共団体の方と議論をしながら、われわれにないメニューだって持ち込む必要があると思うのです。そういう議論をしながらやるべきだし、その部分もコミットしていかなければいけない。そういう施策を出していただくことも含めて求められているのではないかと思います。

澤登 一層ローカルで根づかせる。グローバルだけではなくて、ローカル・アンド・グローバルですね。すばらしいと思います。

芦田 そうですね。新しい国土マネジメントの

ために、行政側もそういう手法をもっていないと、いくらコミュニケーションしてもできませんという答えだけでは、次の発展性がないですね。

工藤 合意形成の手法にも、システム作りとかいろいろ議論はあるわけですが、河川というのは地域の特性とか文化を踏まえたものであるべきですし、そういった意味で、川と地域の人々とかかわりの再構築とか多様なニーズへの対応が目標と思っています。そこにいくために、情報公開、情報共有ですとか、目に見えるところでの合意形成ですとか、そういうことをどんどん進めていく必要があると思います。

澤登 私どもの周りで最近話題になっているのは、住民が等身大のコミュニティービジネスや、NPOが活動しながらソフト面の生活基礎を自ら築いていく動きです。今後の日本経済のことを考えると、その地域の消費行動が活発になることが

不可欠です。自分たちのことは自分たちでしなければ思い出しているし、働き方やビジネスのありようも随分変わってきているような気がします。

芦田 一緒に作ることが満足度を高める方法であり、そのためのツール作りがこれからの課題というのが本日の概ねの結論ということにさせていただいて、この辺で議論を終えたいと思います。世の中の価値観が多様化する中で大変な時代ですが、一方で、所長さんからするといろいろできておもしろい時代でもありますので、工夫しながら、新しいマネジメントの仕方を作ってくださいことをお願いします。また、澤登さんには、今後ともいいアドバイスをいただくことをお願いしまして、座談会を終わりたいと思います。

本日は本当に、ありがとうございました。

